

イザヤ14章12-15節 「天から落ちるサタン」

1A 明けの明星 12

1B 神の輝き

2B 天から地への墮落

2A 神になりたい欲望 13-14

1B 自分の意志

2B 競う高ぶり

3A 高慢の後の破滅 15

本文

私たちの聖書通読の学びは、先週で12章まで来ました。午後には13章と14章を読み進めたいと思います。今朝は12章12-15節に注目したいと思います。「12 暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。13 あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。14 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』15 しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」

イザヤの預言は、13章からイスラエルの周囲の国々に対する神のメッセージ、宣告になります。その初めがバビロンに対する宣告です。バビロンは今のイラク南部にあった大国ですが、アッシリアの後にバビロンが台頭します。それでエルサレムは、紀元前586年にバビロンによって滅ぼされました。けれども紀元前539年、メディアとペルシアの連合軍がバビロンの町に突入し、王を殺してバビロンは滅ぶことになります。その出来事を背景にして、神が終わりの日にまで及ぶバビロンへの神の裁きを13章と14章で宣言しています。

14章4節に「バビロンの王について、このようなあざけりの歌を歌って言う。」とあるように、バビロン王が倒れたことに対する宣言になっています。けれども、12節からその様相が少し変わります。人に対して語っているような言葉ではないのです。ここが聖書預言を読む時に大切になる部分ですが、初めは人や国に対して語っているようで、途中からその背後で支配している霊的存在に対して語るということがあります。エペソ6章には、悪魔の策略に対して立ち向かうために、その格闘が「主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するもの(12節)」とあります。国や組織の動きの背後に、こうした悪魔による支配があって、横暴なことや、残虐なことを行なうことができます。

そこで私たちは今朝、サタンについてしっかりと見つめたいと思います。サタンは、罪人を支配している支配者であります。「エペソ2:2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、

空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。」悪魔は偽りの父であり、殺人者です。「ヨハネ 8:44 悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」そして悪魔は破壊者です。「黙示 9:11 彼の名はヘブル語でアバドンといい、ギリシヤ語でアポリュオンという。」(どちらも「破壊者」という意味です。)そして、悪魔は中傷者です、兄弟を絶えず告発しています。「黙示 12:10 私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。」そして、神に従って、この悪魔に立ち向かいなさいとヤコブは手紙で勧めました。これほど身近な存在として悪魔がいますが、私たちは彼の起源が何なのか、どこから来たのかを、このイザヤ書の箇所から見ることができます。

1A 明けの明星 12

12 節を見てください、「**12 暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。**」この箇所について、イエス様が弟子たちに言及されたことがあります。ご自身の権威を授けて弟子たち七十人を遣わしましたが、戻ってきた彼らが、悪霊がイエス様の御名によって追い出すことができたことを喜んで帰ってきました。そしてイエス様が、「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。(ルカ 10:18)」と言われました。イエス様は、たった今、サタンが天から落ちたかのように話されましたが、はるか昔、サタンが天から落ちたことを話されているのだと思います。サタンは天から、神の御座のある領域から落ちた者です。

1B 神の輝き

彼は、「**暁の子、明けの明星**」と呼ばれています。13 節には「**神の星々**」とありますが、これらは天使のことを指しています。夜明け前、最も光輝く金星のような星のことですが、夜が明けようとしていてもなおのこと輝いている、最も光を放っている存在です。つまり、天使の中で最高級の天使長であり、神にとっても近かった存在であったことが分かります。そして私たちの主イエス様ご自身も、「**明けの明星**」と呼ばれています(黙示 22:16)。イエス様は神の本質の完全な現われとしての神の栄光の輝きですが(ヘブル 1:3)、サタンも神の輝きを最も色濃く表していた存在でありました。ちなみに、ラテン語の聖書で「ルシファー」と訳されています。

エゼキエル書 28 章では、彼が最高の美を備えらえた、エデンの園にいるケルブであることが教えられています。ケルブはケルビムの単数形で、ケルビムのことです。「28:12-15 神である主はこう仰せられる。あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった。あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石があなたをおおっていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、しまめのう、碧玉、サファイヤ、トルコ玉、エメラルド。あなたのタンバリンと笛とは金で作られ、これらはあなたが造られた日に整えられていた。あなたは油注がれた守護者ケルブ。わたしはあなたに与えた。あなたは神の山にいて、火の石の間を歩いていた。あなたの行ないは、あな

たが造られた日からあなたに不正が見いだされるまでは、完全だった。」けれども 17 節に、「あなたの心は自分の美しさに高ぶり、その輝きのために自分の知恵を腐らせた。」とあります。

彼がなぜそこまで完全なほどの美を持っていたのかと言いますと、第一に神に近い存在だったからです。神に近づいているからこそ、神の栄光の輝きを反射させていました。第二に、「けれども、神ではなかった。」ということができます。神に近いのですが、神ではないのです。この二点目が大事なのですが、ケルブは飽くまでも神に仕える御使いであり、神に仕えるということにおいてのみ、神の輝きを放っていました。自分も栄光に輝いているのですが、彼自身は神に仕え、神を礼拝し、「神は偉大な方です。」と告白して、神の前にひれ伏す存在なのです。

ところが、この第二の点において彼は過ちを犯しました。神に近くても神ではないというところが、あやふやになりました。あたかも自分自身が神であるかのように己惚れました。神に近づいて礼拝する者が、自分が神ではないということを忘れてしまった訳です。私たち人間には、神によって造られた空洞があります。それは礼拝し、あがめ、仕えるという欲求です。私たちがまことの神に近づき、この方に仕え、従う時に、私たちからも神の輝きが現れます。パウロが祈りの中で、「神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。(エペソ 3:19)」と言いました。

ところが私たちが神に満たされることをやめる時、つまり祈り、すべてのことをイエスの御名で行うことをやめ、自分で何かをしているようになる時に、その礼拝の対象は自分自身になります。自分があがめられ、注意を引き寄せ、仕えるのではなく仕えられ、従うのではなく、従ってもらいたいという欲望に満たされます。そしてこれは、ケルブが神のそばにいて高ぶったように、神に近づいているからこそ陥る罠です。小さな子どものことを考えてください。小さな子が、「見てみて！」と分けて、親に自分のできることを披露します。そしてお父さん、お母さんは、「すごいね！」とほめます。そのほめられるのが大好きなんですね。人間には、このほめられたい、注目されたい、自分を中心にしたいという欲求があり、それはまさに「神になりたい」ということの表れなのです。

そしてサタンは、エデンの園で自分の運命に人間を引きこみました。主は、ご自分の造られた人間に次のように命令されました。「創世記 1:26 われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」神のかたちに似せて人は造られました。そして、その似ているというのは、神が被造物を支配されているように、地にあるものを支配させるようにして似せて造られました。したがって、人は二つのことが言えます。第一に、神に似た者であること。けれども第二に、神ご自身ではない、ということです。人は神に拠り頼み、神の命じられることを聞き、この方に従うことによって、初めてこの地を支配することができます。神に仕えながら、神のように大きな仕事をするすることができます。これは恵みであり、栄誉ある働きです。

ところがサタンは、その境目を壊しました。善悪の知識からの実は、「3:5 あなたがたがそれを食

べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」と言ったのです。神に頼る、神との交わりをするのではなく、自分でやっていく、神になっていくようにして善悪を知ることができる、賢くなることができるという誘いに乗ってしまいました。私たちが何気にしていることです、神に頼らないで自分で知っているかのようにふるまう、何気ないことであれば私はここに知識があるから、自分でやっていけると思うことです。このような考えの起源は、サタンであります。全てのことについて神の御名によって、神に拠り頼んで行なうところを、自分で出来ると思っているのです。すべての良き物は神からの賜物であり、それを私が管理しているにしかすぎないのに、そう思ってしまいます。

2B 天から地への墮落

そして、「**どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。**」と言っています。天から落ち、地に倒されたと言っていますが、聖書全体を見ると、段階を踏んでいます。イエス様が弟子たちに言われたように、サタンは今、天から落ちています。天と言っても、神の御座のある天から落ちたのであり、けれども、地上とも天とも接触のある「空中」とも呼ばれているところに存在します。先ほどエペソ 2 章で読みましたが、「**空中の権威を持つ支配者**」として呼ばれています。ヨブ 1 章には、サタンが神の前に出て、なお地上にいるヨブに対して害を加えることが、主の許しの中で行われています。

今、サタンはこのようなところにおります。しばしば、サタンをあたかも神と同じような地位に引き上げることがあります。サタンと互角なのは同じ天使長であるミカエルなどであり、非常に力ある、主権のもつ存在であることは確かなのですが、サタンは全知全能ではないし、全てのところに遍く存在できるのでもありません。神とは互角ではなく、飽くまでも神の許しがなければサタンは何の行動も移せないのです。そして神はサタンの活動に、制限を設けておられます。私たちは忘れてはいけないうのは、悪の力と言えども、それは神の許しあつての力なのだということなのです。神が支配しておられるのです。ですから、まるで私たちが神を助けなければいけないかのように、私たちが悪に立ち向かわなければいけないと考えるのは間違っています。それよりも、すべてを治めておられる神ご自身に従うことが先です。そして悪魔に立ち向かうのです。また、悪魔の力に抗うことができずに、悪を行なってしまったと言いつ事をするのも誤りです。自分が耐えられない誘惑を神は許されない、耐えられるように逃れの道を備えておられると約束してくださっています。

そして、神が終わりの日に患難を地上に下します。その時に悪魔も空中から地上に落とされます。「黙示 12:9 こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。」そして、地上には獣の国と呼ばれる反キリストの国ができます。悪魔が最後に自分の本性を全開にする時期です。そして、主キリストが地上に戻って来られます。その時に悪魔は、さらに低い所、すなわち「底知れぬ所」に投げ込まれます。「黙示 20:2-3 彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛って、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上

に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。」そして千年が経って、サタンは火と硫黄の燃える池、ゲヘナに投げ込まれることとなります。ですから、天から空中へ落ち、空中から地上に落ち、それから底知れぬ所に落ち、そしてゲヘナ、地獄に落ちます。こうして、自分を高めた者は最も低められたことができます。

地獄に人を投げ込むなど、神は酷い方だと非難する人たちがいます。しかし、それは間違いです。神は地獄を人間のために造られませんでした。悪魔とその使いのために造られました。しかし、福音の真理に従わなければ、悪魔の偽りに聞き従い、悪魔の言いなりになっています。そして悪魔のために造られた地獄に、自らもそこに入ることを選んだのです(マタイ 25:41)。

2A 神になりたい欲望 13-14

そして 13-14 節を読みましょう。「13 あなたは心の中で言った、『私は天に上ろう。神の星々のほるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。14 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』」

1B 自分の意志

明けの明星、ルシファーの問題は何だったのでしょうか？一つに、「私」という主語が問題であることが分かります。日本語は主語が曖昧ですが、「私は天に上ろう。私は神の星々のほるか上に私の王座を上げ、私は北の果てにある会合の山にすわろう。私は密雲の頂に上り、私はいと高き方のようになろう。」と言っているのです。バビロンの王、ネブカデネザルがその栄華を極めたバビロンを見た時に、同じ言葉を発していました。「ダニエル 4:30 この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」私が、私が、私が…、となっています。これが高ぶりの根っこです、神、キリストではなく「私」であります。その反対に、へりくだりとは「私」ではなく、「神、キリスト」です。

私は、というような時に、それが自慢している時だけでなく、自己憐憫であっても、劣等感であっても、また自己嫌悪であっても、自分というものに意識が固着し、神を忘れている時に人は悪魔の思いと一つになっていきます。「私」ではなく「神が」となった時に、そこに信仰が生まれ、信頼が生まれ、へりくだりと従順が生まれます。しかし、神に従うという魂から離れたものは、制御不能の原子炉のように、どんどん自分を強く、大きくしていかなければいけなくなります。自己が肥大化していくのです。そしてここにあるように、神の座に着かなければ気が済まなくなる、満足できなくなってしまうのです。

2B 競う高ぶり

そしてサタンがここで意識しているのは、他の星々です。他の御使いがいるけれども、彼らよりも優るために、優位に着くために高き所にいたいという欲望がありました。全能者なる神と比較して、この方を羨望して、直接、そのようになりたいと願っているのではなく、他の競争相手を比較して、

優位に立ちたいために神の御座に着きたいと願ったのです。

したがって、傲慢や高ぶりというのは、競争によって成り立っています。C.S.ルイスがかつて言いました。「われわれのプライド(傲慢・自負心)はたえず他者のプライドと競り合っているのである。プライドは本質的に競争的である。プライドは何かを所有することに喜びを感じずるのではなく、隣人よりもより多く所有することに喜びを感じるのである。」¹クリスチャンではないですが、嫉妬について、妬みについてこのように説明した人がいます。「嫉妬は、「嫉妬する相手」の置かれた状況や得たものをうらやむことから始まる。この時、自分とあまりにもかけ離れた環境にある人物に対しては、あこがれや羨望の気持ちを持つかもしれないけれど、それが本格的な嫉妬につながることは起きにくい。…たいていの場合、嫉妬は、微妙な差異から生じる。わずかしき差のないはずのライバルや、あるいは自分より格下と思っていた後輩が、私生活で幸運を手にしたとき、あるいは立派な仕事上の業績を打ち立てたとき、嫉妬心抜きで、すなおに相手を称えることのできる人はそう多くはないように思える。²」近くにいる人々が、自分よりも祝福されている、恵みがある、上位に立っているというところを知る時に、それに対する激しく反発する心、それが嫉妬であり、そして高ぶりであり、サタンが墮落した動機でありました。

そして、高い所に着きたいというのは、何でも自分の思い通りにさせたいという願いもあるでしょう。私たちは、何か自分の不都合なことが起こった時に、へりくだって主に祈ることができればよいのですが、そうではなく自分の強い意志をいつまでも貫きます。このような頑なさ、まさに自分が神になりたいと願っている表れです。詩篇 82 篇には、さばき司、裁判官に対する神の裁きの宣言があります。彼らに対して神はこう宣言されます。「6-7 節 わたしは言った。「おまえたちは神々だ。おまえたちはみな、いと高き方の子らだ。にもかかわらず、おまえたちは、人のように死に、君主たちのひとりのように倒れよう。」彼らが人の運命を定める力を持っていることで、自分が神のようになっているとおごっているため、皮肉を込めて神は彼らを「おまえたちは神々だ。」と呼んでいます。

3A 高慢の後の破滅 15

そして 15 節を見てください。「しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」であります。これは先ほど見たように、地に落とされるだけでなく、地に下にまで、底知れぬ穴に鎖でつながれます。こうやって、自分を高める者は、低められるのです。そしてサタンは、人を高ぶらせ自分のために引きずり込もうとしています。

私たちは、その策略からどのように守られるべきでしょうか？それは、また別の意味で神のようになりたいと願うことです。それは、キリストのようになりたいという願いです。サタンは神のようになろうとして、落とされましたが、キリストは神の身分であられたのに、それに固執されず、しもべの姿を取って、十字架の苦しみにまで従われた方です。「ピリピ 2:6-11 キリストは、神の御姿であ

¹ <http://blogs.yahoo.co.jp/masatakahamazaki/22980350.html>

² <http://www.gentosha.jp/articles/-/3659>

られる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。8 それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」

8 節までのキリストに従うことです。私たちがキリストにならいたい、この方に付いていきたいと願う時に、この方から目を離さない時に、自分の持っている権利や地位に固執しようとは思わなくなります。もし主がそう言われるのであればと言って従い、仕えられるのではなく、仕えるようになりたいと願います。そして、ある時は犠牲を払うことになるでしょう。自分のこれは持っていて、それを手放さなければ神に仕えたいではなく、その大切なものでも主が言われるのでしたら手放しますという、従順な心を持つことです。そうすれば、9 節以降です、自分ではなく神が自分を引き上げてくださいます。キリストには、すべての名にまさる名が与えられました。けれども 11 節を見てください、ほめたたえられたのはキリストではなく、父なる神ご自身です。それは、キリストが神に従っているためであり、神に従っているからこそこの方と一つになり、交わっており、この方から神の栄光を見るからです。

キリストに倣うことによって、私たちは高められます。それは自分を低くする道です。高くすることは、神にお任せすればよいのです。そして高められる時に、自分ではなく、主イエスの名がほめたたえられます。